

《第38回弘明寺サロン開催記》

平成27年度第一回同窓会企画行事 「元気に笑いましょう」

日時：2015年6月12日（金）JR根岸線「桜木町」10時集合

場所：横浜能楽堂、横浜にぎわい座

参加者：22名

行程：横浜能楽堂10時20分頃到着、見学 ～ 横浜にぎわい座2時開演

三遊亭全楽、江戸家子猫、三遊亭円楽独演会～夏を先取り…三席相勤候～

「唐茄子屋政談」、「青菜」、「欠伸指南」の三席。終了後（16時半ごろ）流れ解散

気象庁の梅雨入り宣言後の小雨の一日、横浜桜木町界隈で 日本の古典芸能二種を楽しむ。
紅葉ヶ丘の「横浜能楽堂」の施設見学を皮切りに 昼食後、午後は野毛大通りのにぎわい座へ。



鏡の間で舞台に出る前のチェック ⇒ あの世とこの世の境目の揚幕を二人掛りで揚げる ⇒ 揚った揚幕をくぐって舞台へ



本舞台は1875年明治8年に旧加賀藩主、前田齊泰により建てられ、齊泰の死後、旧高松藩主松平家に譲られた後、1965年に解体されてしまうという遍歴を重ねます。しかし部材として大切に保管されていて 横浜市内在住のシテ観世流能楽師・田邊竹生氏から寄贈を受け 現在の地に平成8年に50%の部材を利用して再建され、本舞台を再現出来たということです。 大滝学芸員さんの

丁寧な説明を受け、持参の白足袋に履き替え 本舞台上に上がる体験は感動でした。



← 能楽堂を後にして野毛大通りの横浜市芸能センター(通称にぎわい座)へ

会場は六代目三遊亭円楽独演会に魅かれてほぼ満席の盛況、前座の全楽さん、江戸家子猫さんも実力のある舞台を披露し 円楽さんも評判に違わず 標題「元気に笑いましょう」通りの舞台を堪能することが出来ました。



参加された藤井孝子様より丁寧な感想をいただきました。 藤井様、ありがとうございました。

6月も半ばとなり我が家の庭の紫陽花も真っ盛りです。この度はいろいろお世話になり心からお礼を申し上げます。お能はシンプルで丁寧な芸術であり普遍性がありますね。私たちの生活の中にも当てはまるように感じました。あらためて一日一日を大切に生活したいと思っております。

藤井孝子





谷合初恵様、保坂正伯様より 詳細な情報を織り込んだ見学記をいただきました。 谷合様、保坂様、ありがとうございました。 下記に全文を そのまま転載いたします。お能、にぎわい座の臨場感が伝わってくる見学記です。

←本舞台、鏡板を背に

本舞台右奥の切戸より観客席を望む →

横浜能楽堂とにぎわい座

谷合 初恵

能は、若い頃友人に誘われて水道橋の能楽堂へ2、3度鑑賞に行ったことがあります。

当時は何もわからずただ退屈した記憶がありますが、伝統の持つ様式美、静謐な雰囲気は妙に心に残るものがありました。 今回、能楽堂の見学が出来るとあって滅多にない機会と思い参加しました。

内部に入って先ずかぐわしい檜の香りに包まれ新鮮な感動で異空間へ連れて行かれました。

さほど広くはなく、客席のどこからでも舞台が近くに感じられます。 舞台の回りには白州が敷かれており、これは能がもともと野外で演じられたもので、その頃の名残だそうです。 太陽光や篝火が白州に反映して照明効果があったそうです。

いよいよ白足袋に履き替えて舞台上がりました。 あげ幕を人力で持ち上げてそこをくぐり橋がかりという花道のような廊下を進んで舞台に立ちます。 ちなみに能の歩き方はすべて摺り足です。

舞台には四方に柱があり特に先端の目付け柱と呼ばれる柱は役者が能面をつけて演じるとき、舞台から落ちるのを防ぐ重要な役割があるそうです。 能面は目にあたる穴が小さいので視野が狭く足元も見えないほどでそういう状態で演じるには目印になる柱が必要になるからです。 面は役柄をわかりやすくするためのもので、すべてにつけるといってもいいそうです。 役者は歌舞伎と同じく男性ばかりと思いましたが、そういう決まりはなく最近女性の志願者も少しずつ出てきているそうです。

また、世襲制かどうかお聞きしたところ、そういう場合もあるがまったく新しく参入しても十分チャンスがあり、門戸は広いようです。 舞台裏まで案内していただいて表に出る頃には、近いうちに能を見に来ようという気になっていました。

お昼は適当な人数に分かれて、それぞれ好きなところで済ませて、にぎわい座へ。

人気の円楽の出演とあって、ほぼ満席でした。 ほかに前座の落語、子猫の物真似があり子猫というのはあの猫八のお間に軽妙なトー30分の長丁場した。 普段落語顔を覚える程度なのだとな納得し次の機会に」とか

横浜にぎわい座



孫さんにあたるそうです。 物真似だけかと思っていたらくをはさんで、十分に笑わせてくれました。 円楽の落語はで最初は軽い調子で入ってだんだんに引き込まれていきまを聴く機会はほとんどなく、テレビの大喜利などで落語家でしたが、こういう長い噺をじっくり聞くのが落語の醍醐味でした。 でも最後悲劇的な場面でぷつり切れて「続きはいって終わったので「アラッ!？」。

私がかかってと期待していたのに、皆さん真面目に(?) 帰宅されたので またまた「アラッ!!」でした。

JR 桜木町から 200mほど横浜駅方向に歩き、紅葉橋交差点を戸部方面に左折して 150mほど坂道を上って右折、間もなく掃部山公園の一角に位置する(徒歩 9 分)閑静な森のなかの佇まいであった。

掃部山公園は、明治初期“汽笛一声新橋を”で知られている日本で初めての鉄道開通を祝い命名された公園で、終点の横浜駅(桜木町駅)に近く、当時建設を指導した外国人鉄道技師の官舎があり鉄道山と呼ばれていた。1887(明治 17)この場所を井伊家を買取り、1909(明治 42)横浜開港 50 年記念に、井伊直弼の銅像が建立されて官位であった掃部頭(かもんのかみ)から掃部山と呼ぶようになった。(井伊大老はペリーの開国脅威を江戸に入れたい対策として横浜開港を決め、桜田門外の変はこのことが最終原因とされて勤王方に暗殺されたと言われている)

横浜能楽堂の前身は、約 150 年ほど前の 1875(明治 8)東京上根岸の旧加賀藩主・前田齊泰の隠居所の一角に建てられたもので、関東大震災や第二次世界大戦でも焼失をまぬがれて、二度の移築を経て、昭和 40 年の解体後は 部材として保管されていたものが、市内在住の能楽師・田邊竹生氏から横浜市に寄贈され、平成 8 年「横浜能楽堂」の開館にあたり本舞台として蘇ったものである。

さて、いよいよ入館です。当日は私たち放送大学同窓会見学会貸切で、上演はなかったが 本舞台と客席(約 400 席)の間の白州と呼ばれる敷砂利付近の客席に着いて、学芸員による能の歴史や舞台の説明から能の世界に誘われていった。本舞台は前述の保管されていた部材を修復し組み立てられていて、ほとんどが「縦の木」材と聞き感嘆。一般的には檜舞台と俗語でも知られているように、ヒノキ材が主流と言われていますが、特別な能楽堂であるという思いが湧いてきました。舞台のバックの鏡板と言われる部分に描かれている「松の木」や「梅の花」(加賀藩家紋)は、初期の色付けのままのことで、ところどころ緑の葉に色落ちがあって歴史の重みを彷彿させてくれました。能を舞う演者は能面から見える景色の下方が見えないので、立ち位置がわからず舞台からの転落のおそれがあるため、目付柱を目測しながら舞うそうです。揚幕は二人がかりで、幕すその両端に結びつけた「竹竿」を演者の出入りに合わせて、上下(魚釣り様に)させて人力で行う構造は、今も昔もそのまま、能の形式・様式は全く変わらないのだそうです。



しかし、そこそこの重みある揚幕を長い時には演者に合わせて 10 分程度も同じ姿勢を続けるときもあるとのことで、「辛抱づよさ・我慢づよさ」の日本文化の礎を垣間見た気がしました。

面白く思ったことは、揚幕の楽屋側が「あの世」で舞台側が「この世」に例えられているそうです。揚幕から舞台へ向かう「橋がかり」(通路)の両側にある松の木は、舞台側から揚幕に向かって高さを変えて、遠近法による効果を取り入れられていて、600年の昔からその手法が使われていたことに感心しました。この機会に、「横浜能楽堂」訪れて「いにしえ」に思いを馳せて見るのはいかがでしょうか。

お心のこもった感想文、見学記を頂いて 6 月 12 日の平成 27 年度第一回同窓会企画行事兼弘明寺サロンの開催記をまとめることが出来ました。次回からの同窓会の行事にもご参加くださいますようにご案内申し上げます。(万場由美子・記)